

## 学位論文審査の概要

博士の専攻分野の名称 博士（医学） 氏名 シャロン ジャネット ブルース ハンリー  
Sharon Janet Bruce Hanley

主査 教授 玉腰 暁子  
審査担当者 副査 教授 櫻木 範明  
副査 教授 玉城 英彦  
副査 教授 荒戸 照世

### 学位論文題名

BARRIERS TO AND PREDICTORS OF HUMAN PAPILLOMAVIRUS (HPV) VACCINE ACCEPTANCE IN PARENTS OF ADOLESCENT GIRLS: MAXIMIZING THE PUBLIC HEALTH IMPACT OF HPV VACCINATION IN JAPAN  
(思春期の娘を持つ親の子宮頸がん予防 HPV ワクチンに対する認知と受容：  
接種率向上のための要因解明)

出産適齢期の日本人女性に最も発症率が高いがんである子宮頸がん（以後、頸がん）は、原因となるヒトパピローマウイルス（HPV）に対するワクチン接種により約 80%減少させると推定されている。しかしワクチン普及の最大障壁は、接種対象者が自立不十分な思春期女子という点であり、接種率向上には保護者の理解が鍵となる。そこで、接種率向上の方策を検討するため、思春期女子を持つ母親を対象とする頸がん及び HPV ワクチン接種に対する 2 つの意識調査を実施した。結果では、ワクチン接種が無料なら娘に接種させるとした母親が多かった一方で、全額自己負担でも接種させる母親は殆どいなかった。接種の障壁は安全性に対する不安と母親の頸がん検診受診歴が無いことであった。医師の勧奨、保健所などからの案内や娘の同級生の接種状況は意思決定に前向きな影響を与え、ワクチン効果を納得することもワクチン受容度に関連した。また、頸がん受診率の低い地域では自己負担なく接種できる場合に、詳細な情報提供がワクチン受容度を高めることを示した。本研究の結果により、接種率向上の要因が明らかとなった。

質疑応答で、副査の荒戸教授から海外のワクチン安全性に対する考え、玉城教授からワクチン効果の持続性、有効性に関する国別比較、櫻木教授から近年の若年女性の頸がん増加の原因、検診受診率を改善する方策、主査の玉腰教授から HPV ワクチンに対する父親の態度などの質問があった。申請者は自身の研究結果や先行研究を引用し、これらの質問におおむね適切に回答した。

この論文の一部は英文国際誌に既に掲載されている。また、この成果をもとに今後日本人女性を対象とした頸がん予防事業が広く普及することが期待される。審査員一同は、これらの成果を高く評価し、大学院課程における研鑽や取得単位なども併せ申請者が博士（医学）の学位を受けるのに十分な資格を有するものと判定した。